

東晋末における謝靈運

森野繁夫

謝靈運の生涯は、①起家の頃まで ②劉裕に仕えるまで ③宋朝に仕えてから永嘉太守に左遷されるまで ④永嘉太守の時期 ⑤始寧隱棲前期 ⑥文帝の徵召と始寧隱棲後期 ⑦広州流罪と棄市に分けることができる。その四十九年の生涯の詳細を明らかにするために、以下、順を追って見ていくことにする。この度は①と②、すなわち「東晋末における謝靈運」について、次の順序で述べることにする。

- 一、誕生から烏衣巷の暮しまで
- 二、起家から大司馬參軍、劉毅幕下まで
- 三、劉毅幕下から劉裕幕下まで
- 四、劉裕幕下

一、誕生から烏衣巷の暮しまで

1 誕生と幼・少年期

謝靈運は東晋の武帝の太元十年(三八五)に生まれた。父親は謝瑒、母親は劉氏で王羲之の子獻之の甥女。祖父

は謝玄。謝玄の従叔は謝安であった。靈運の誕生、および幼年期の様子については、梁・鍾嶸の『詩品』上品、謝靈運の條に次のようにある。

初め錢唐の杜明師、夜に「東南に人有り、來りて其の館に入る」を夢む。是の夕べ、即ち靈運は會稽に生まる。旬日にして謝玄亡す。其の家、子孫の得難きを以て、靈運を杜治に送りて之を養はず。十五にして方めて都に還る。故に小名は客兒なり。

初錢唐杜明師、夜夢東南有人、來入其館。是夕即靈運生於會稽。旬日而謝玄亡。其家以子孫難得、送靈運於杜治養之。十五方還都。故小名客兒。

謝玄が亡くなつたのは太元十三年、靈運が四歳の時のことであり、「旬日にして謝玄亡す」という記事とは合わない。太元十年に亡くなつたのは謝安の方であり、「謝玄亡す」は「謝安亡す」の譌りであろうが、いずれにしても靈運は、名士であり大人物であった一族の棟梁の生まれ変わりという考えを、謝家の人々は持っていたらしい。「靈運」(靈しき運りあわせ)という名は、そのことと関

わりがあるのであろう。

会稽で生まれた靈運は、謝家の後継ぎとして大切に育てるために、靈運誕生に縁のある杜明師に養育を依頼することになり、彼の住む「杜治」に送られた。

「杜明師」とは、杜昊、字は子恭のことで、『南史』沈約伝によれば、

初め錢唐の人 杜昊、字は子恭。通靈にして道術有り。

東土の豪家、及び都下の貴望は、並びに之に事へて弟子と為る。

初錢唐人杜昊、字子恭。通靈有道術。東土豪家及都下貴望、並事之為弟子。

とあり、また『三洞珠囊』卷一、教導品、道學伝には、杜昊、字は子恭。心を虚しくして物を拯ひ、信施を求めず。遂に治静を立てて、広く救護を宣べ、立ちどころに駭あらざる莫し。

杜昊、字子恭。虚心拯物、不求信施。遂立治静、広宣救護、莫不立駭。

とある。すなわち靈運は幼い頃、錢唐の道士である杜昊（二に杜昊）の「治静」に預けられたのであった。

そうして靈運は、十五歳になつて始めて錢唐から都建康に還つてきた。

2 烏衣巷の時期

建康に還つた靈運は、従叔の謝混（謝安の孫）の邸、それは陳郡の謝氏が集まつて住んでいる烏衣巷に在つた

が、そこで謝瞻、謝晦、謝曜、謝弘微、謝弘元ら、謝氏の同世代の若者たちと交わりを結ぶことになつた。謝瞻、謝晦は謝重の子、謝曜、謝弘微、謝弘元は謝思の子である。『宋書』謝弘微伝には、其の頃の様子が次のように述べられている。

謝混は風格高峻にして、交はり納るる所少なし。唯だ族子の靈運、瞻、曜、弘微と、並びに文義を以て賞會し、嘗に共に宴處す。居ふところは烏衣巷に在り。故に之を「烏衣の遊び」と謂ふ。混の五言詩に「昔

烏衣の遊びを為すに、戚戚として皆な親姪なり」と云ふ所の者なり。其の外は復た高流時譽のものと雖も、敢へて門に造る無し。

混風格高峻、少所交納。唯與族子靈運、瞻、曜、弘微、並以文義賞會。嘗共宴處、居在烏衣巷。故謂之烏衣之遊。混五言詩所云「昔為烏衣遊、戚戚皆親姪」者也。其外雖復高流時譽、莫敢造門。

「謝弘微伝」には、続けて、謝氏の棟梁であつた謝混の、次のような言葉が紹介されている。

阿遠は剛躁にして氣を負み、阿客は博くして檢無し。曜は才を待みて、操を持すること篤ならず。晦は自らを知るも善を納ること周ねからず。設し復た功三才を濟さば、終には亦た此を以て恨みと為さん。微子の如きに至りては、吾は間然する無し。

阿遠剛躁負氣、阿客博而無檢。曜恃才而持操不篤。晦自知而納善不周、設復功濟三才、終亦以此為恨。至如微子、吾

無間然。

「遠」は瞻の字、「客」は靈運の幼名。ここで靈運は「博くして檢無し」と評されている。

また「謝弘微伝」には「謝混は嘗て酣宴の餘に因り、韻語を為して以て靈運、瞻らを奨勸して曰く」として、以下のように謝混の言葉を挙げてゐる。

康樂は通度を誕まにし、実に名家の韻有り。若し繩染の功を加へ、瑩を割けば乃ち瓊瑾とならん。宣明は遠識を體し、穎達にして且つ沈儁なり。若し能く方執を去らば、穆穆として三才順はん。

阿多は獨り解すること標く、弱冠にして華胤を纂ぐ。質勝り文無きを誡む、其れ尚くして又た能く峻し。通遠は清悟を懷き、采采として蘭訊に標はる。轡を直くすれば躓かざる鮮し、抑へて用て偏吝を解かん。微子は微尚に基き、勸むこと無く由ほ藺を慕ふ。一簣の少くを軽んずる勿く、進み往けば將に千仞たらんとす。数子之を勉めん哉。風流爾に由りて振はん。如し知る所を犯さずんば、此の外に慎む所無し。

康樂誕通度、実有名家韻。若加繩染功、剖瑩乃瓊瑾。宣明體遠識、穎達且沈儁。若能去方執、穆穆三才順。阿多標獨解、弱冠纂華胤。質勝誠無文、其尚又能峻。通遠懷清悟、采采標蘭訊。直轡鮮不躓、抑用解偏吝。微子基微尚、無勸由慕藺。勿輕一簣少、進往將千仞。数子勉之哉。風流由爾振。如不犯所知、此外無所慎。

康樂とは謝靈運のことであり、此のころ既に父祖の「康

樂公」の爵位を継承していたようである。宣明は謝晦、阿多は謝曜、通遠は謝瞻。微子は謝弘微のことで、それぞれに謝氏の将来を担う存在となることを期待されていた。ここでの、靈運についての謝混の評価、

・阿客は、博くして檢無し。
・康樂は、通度を誕まにし、実に名家の韻有り。若し繩染の功を加へ、瑩を割けば乃ち瓊瑾とならん。とは、つまり「博らかであつて檢が無い」「通度(物怖じしない性格)を恣のままにして、誠に名家の育ちの良さを持つてゐる。もし教育の効果によって、餘分な輝きを除くようにすれば、美しい玉となるであろう」という意味であろうか。

謝混は靈運の、名家の出ということもあつて、才能にまかせて物怖じすることなく、時と場所を弁えない言動を心配していたようである。

そのためであろうか『宋書』謝瞻伝には、次のような話も記されている。

靈運の父瓊は、才能無く、秘書郎と為り、早年にして亡す。靈運好んで人物を臧否す。混は之を患ひ、裁折を加へんと欲するも、未だ方有らざる也。瞻に謂ひて曰く「汝に非ざれば能くする莫し」と。乃ち晦、曜、弘微らと共に遊戲するに、瞻をして靈運と車を共にせしむ。靈運車に登るに、便ち人物を商較す。瞻は之に謂ひて曰く「秘書早に亡し、談者亦た互ひに同異有り」と。靈運默然たり。言論此より衰止る。

靈運父煥、無才能、為秘書郎、早年而亡。靈運好臧否人物。混患之、欲加裁折未有方也。謂瞻曰「非汝莫能」乃與晦、曜、弘微等共遊戲、使瞻與靈運共車。靈運登車、便商較人物。瞻謂之曰「秘書早亡、談者亦互有同異」靈運默然。言論自此衰止。

靈運は、時の人物の才能について批評することを好んだが、そのために問題を起こすことを心配した謝混は、謝瞻に頼んでそれを止めさせようとした、という。「秘書」とは靈運の父煥のこと。このことから自分の才を誇つて、人を見下すところのある靈運の性格を見てとることができよう。

『宋書』本伝には、靈運の才能について次のように記している。

靈運は幼にして便ち穎悟、(謝)玄甚だ之を異とす。少くして学を好み、群書を博覧す。文章の美、江左逮ぶもの莫し。従叔の謝混特に之を知愛す。

靈運幼便穎悟、(謝)玄甚異之。少好学、博覧群書。文章之美、江左莫逮。従叔謝混特知愛之。

謝混は靈運の「穎悟」なる才能を「知愛」していたからこそ、その「検」の無い性格を心配していたのである。「群書を博覧」したことについては、その「山居賦」の終りの辺りで、

六藝は以て聖教を宣べ、九流は以て賢徒を判つ。国史は以て前紀を載せ、家伝は以て世模を申ぬ。篇章は以

て美刺を陳べ、論難は以て有無を覈らかにす。兵技医日、龜策筮夢の法、風角冢宅、算数律曆の書は、或いは平生の流覧する所なるも、並びに今に於て諸を棄つ。

六藝以宣聖教、九流以判賢徒。国史以載前紀、家伝以申世模。篇章以陳美刺、論難以覈有無。兵技医日、龜策筮夢之法、風角冢宅、算数律曆之書、或平生之所流覧、並於今而棄諸。

と言っているように、全ての学に通じていたようであるし、また「文章の美、江左逮ぶもの莫し」に関しては、同じく「山居賦」に次のように詩文についての自信のほどを記している。

伊れ昔 齟齬にして、実に斯の文を愛す。紙を援り管を握れば、性に会し神に通ず。詩は以て志を言ひ、賦は以て敷陳す。箴銘誄頌、咸各の倫有り。

伊昔齟齬、実愛斯文。援紙握管、会性通神。詩以言志、賦以敷陳。箴銘誄頌、咸各有倫。

このように溢れんばかりの才能と、そのことに大なる自信を持っていた靈運は、同族謝家の、それぞれに個性豊かな若者たちと競い合いながら烏衣巷での日々を過ごしていた。

その様子は既に挙げたように『宋書』謝弘微伝に記されていたが、其の他に、靈運の「答中書」詩、すなわち烏衣巷での生活から約十年の後、靈運が義熙八年(四一三)頃、劉毅に従って荊州府に勤務していた時期に謝瞻

に答えた作にも、靈運の回想として詠われている。すなわち全八章の第二章に、

伊昔昆弟 伊れ昔昆弟と

敦好閭里 閭里に敦好なりき

我暨我友 我暨び我が友は

均尚同恥 尚ぶを均しくし恥を同じくす

仰儀前修 前修を仰ぎ儀り

綢繆儒史 儒史に綢繆たり

亦有暇日 亦た暇日有れば

嘯歌宴喜 嘯歌し宴喜す

「その昔あなたとは、閭里において仲が好かった。私も他の兄弟たちも、尚しとする所を均しくし恥とする所を同じくしていた。前代の賢人を仰ぎ慕って、経書や史書を深く究めたし、暇な日があれば、嘯歌したり宴会をして楽しんだものだ。」—烏衣巷における謝氏の若者達の日々の暮らしぶりを髣髴とさせる章である。この時期の様子については、後で挙げる「贈安成詩」「贈従弟弘元詩」「贈従弟弘元詩—時為中軍功曹住京—」などにおいても詠われている。

二、起家から大司馬参軍、劉毅幕下まで

『宋書』本伝によれば、靈運が最初に任命されたのは員外散騎侍郎であった。則ち、

封を康樂公、食邑二千戸に襲ふ。國公の例を以て、員

外散騎侍郎に除せらるるも、就かず。

襲封康樂公、食邑二千戸。以國公例、除員外散騎侍郎、不就。

「國公の例を以て員外散騎侍郎に任じられたが就かなかった」とあるだけで、なぜ就かなかったのか其の理由はわからない。しかし先に挙げた「中書に答ふる」詩の第三章を見るに、そのことと関わりのありそうなことが詠われている。

聚散無期 聚散期無く

乖忒易端 乖忒は端し易し

之子名揚 之の子名揚がり

鄙夫忝官 鄙夫も官を忝くす

素質成漆 素なる質は漆と成り

巾褐懼蘭 巾褐蘭を懼る

遷流推薄 遷流し推し薄られ

云胡不歎 云に胡ぞ歎ぜざる

「さて、集散には定まった時というものは無く、別離はとかく起きやすいもの。あなたは名を揚げられ、私のような者も官を忝くすることになった。しかし我が素なる質は漆のように汚され、巾褐の身には蘭のごとき衣服が懼くなった。遷し流され推し薄られて、どうして歎かずにおれましよう」—「之子名揚がり、鄙夫も官を忝くす」というのは、謝瞻が任官（『宋書』卷五六、謝瞻伝によれば「初め桓偉の安西参軍、楚台の秘書郎と為る」とある）し、自分も「員外散騎侍郎」に除せられたことを言

うのであろう。そうして其の次の「素なる質は漆と成り、巾褐きんがっ蘭を懼おそる」というのは、詳しいことはわからないが、散騎省の先輩たちとの間がうまくいかなかったことを意味するのではなからうか。恐らく其の原因は、既に述べたような靈運の、その才能を負んで他人を見下す性格に在ったのであろう。

ついで『宋書』本伝には、

瑯琊王の大司馬行参軍と為る。性は奢豪にして、車服は鮮麗。衣裳器物は、多く旧制を改む。世共に之を宗とし、咸みな謝康樂と稱する也。

為瑯琊王大司馬行参軍。性奢豪、車服鮮麗。衣裳器物、多改旧制。世共宗之、咸稱謝康樂也。

とある。「瑯琊王」とは司馬徳文、すなわち安帝の弟で後に恭帝、東晋最後の帝となった人である。彼が大司馬になったのは義熙元年(四〇五)三月で、靈運が此の時に行参軍になったとすれば、二二歳の時である。「中書に答ふる」詩の第四章には此の時期のことが次のように詠われている。

中予備列 中ごろ予は列に備はり

子讚時庸 子は時庸に讚へらる

偕直東署 偕ともに東署に直し

密勿遊従 密みつ勿ぶつし遊従す

彼美頤価 彼の美なる価あはを頤あし

煌煌逸蹤 煌煌として逸いっ蹤しやうあり

振迹鼎朝 迹あとを鼎朝に振ひ

翰飛雲龍 翰たかく雲龍に飛ぶ

「中頃には私は ようやく官吏の列に加えられ、あなたは治まった世において讚えられていた。共に東署に仕えることになり、勤勉に仕事に従事した。あなたは高い聲価を世に顕わされ、優れた業績を輝かされた。朝廷において盛んに活躍され、雲龍の庭を高く飛翔された。」—「東署」とは司馬徳文の役所を指し、謝瞻もそこに仕えていた。時に謝瞻は劉裕の鎮軍参軍として瑯琊王の大司馬参軍を兼ねていた。

この時期の靈運の行状について、『宋書』本伝には「性は奢豪にして、車服は鮮麗。衣裳器物は、多く旧制を改む。世共に之を宗とし、咸みな謝康樂と稱する也」と記してあり、「中書に答ふる」詩に「偕ともに東署に直し、密勿みつむみ遊従す」真面目に仕事に励んだ、と言っているのとは大きく食い違っている。『宋書』本伝にあるような行状は、名家出身の奢りと、其の「才能にまかせて物怖じすることのない、そうして時と場所を弁えない」性格によるものであつたらう。

しかし靈運は其の五月には、豫州刺史となった劉毅の記室参軍に遷っている。そうして次の年、劉毅に従つて姑孰(今の安徽省當塗)に赴任している。(『宋書』卷三六、州郡志に「安帝の義熙二年、刺史劉毅は姑孰に成す」とある)。

靈運が劉毅の幕下に入ったのは、従叔である謝混の指示によるものと考えられる。謝混は謝家の棟梁として、更に豪門世族の代表として、軍閥劉裕の勢力に対抗すべ

く、劉裕の対立勢力である劉毅と手を結んでいた。時に靈運は二一歳、以後七年間、劉毅が江陵に鎮するまで其の幕下に在って各地を移動することになる。

三、劉毅幕下から劉裕幕下まで

この時期、すなわち靈運二一歳から二八歳までの七年間のことについて、『宋書』本伝には、

撫軍將軍劉毅の姑孰に鎮するや、以て記室參軍と為す。毅の江陵に鎮するや、又た以て衛軍從事中郎と為す。毅の誅に伏するや、高祖は版して大尉參軍と為す。

撫軍將軍劉毅鎮姑孰、以為記室參軍。毅鎮江陵、又以為衛軍從事中郎。毅伏誅、高祖版為大尉參軍。

とあるだけで詳しいことは記されていない。劉毅は義熙元年（四〇五）に撫軍將軍となり、次いで豫州刺史となつて姑孰に鎮した後、五年の一月に衛將軍・開府儀同三司に進められた。しかし六年五月、建康に迫っていた盧循の軍と桑落洲で戦つて大敗する。そうしてその十二月に劉毅は江州都督となり、鎮を豫章に移す。そうしてその後まもなく荊州刺史となつて江陵に至る。

やがて劉毅と劉裕の間が険悪となり、義熙八年（四一〇）九月、劉裕は詔を矯つて劉毅討伐の軍を起すが、その前に劉毅の従弟の兗州刺史劉藩と、劉毅の腹心尚書左僕射謝混を殺害している。その矯詔には次のようであった。

劉毅は禍心を苞藏し、逆を南夏に構ふ。（劉）藩・（謝）混は亂を助け、志姦宄を肆まにす。頼りて玄鑿を寧輔し、機を撫して銳を挫かん。凶党即ち戮され、社稷又安ならん。（『晉書』卷一〇、安帝紀）

劉毅苞藏禍心、構逆南夏。藩・混助亂、志肆姦宄。頼寧輔玄鑿、撫機挫銳、凶党即戮、社稷又安。

江陵城は同月に、劉裕の參軍王鎮惡によつて陥落され、劉毅は自殺する。

劉毅の幕下に在つた靈運は、姑孰から江陵まで劉毅の幕府とともに移動していたと思われるが、「中書に答ふる」詩には此の間の事情が次のように詠われている。

嗟茲飄轉 嗟茲飄轉

隨流如萍 流れに随ふこと萍の如し

台岳崇觀 台岳崇觀に

僚士惟明 僚士は惟れ明らかなり

璅璅下陪 璅璅として下に陪し

從公于征 公に従ひて手に征く

遡江踐漢 江を遡りて漢を踐み

自徐徂荊 徐自り荊に徂く（第五章）

「ああ 私はここに風に吹き迷わされて、流れに随う浮き草のようだった。それに引きかえ朝廷の高殿では、かつての同僚達が輝いていた。芥子粒のような下役の私は、主君に従つて地方に出ていった。長江を遡つて漢水の地（官職不明）を踏み、徐州（官職不明）から荊州へと赴任して

いった「瑯琊王の大司馬行參軍から劉毅の幕下に遷り、そこで記室參軍、また衛軍從事中郎となり、以前の同僚たちの中央での活躍を羨ましく思いながら、二十八歳まで約七年間も地方勤務を続けたことを詠う。「下陪・從公」とは、劉毅に従ったことをいう。「徐」は徐州のこととで、治は京口（今の鎮江）に在った。この詩によれば靈運は姑孰から漢水の地へ、更に徐州での任を経て荊州に赴任している。

契關北京 北京に契關し

劬勞西郢 西郢に劬勞す

守宮末局 宮を末局に守り

年月已永 年月已に永し

孰是疲劣 孰ぞ是れ疲劣にして

逢此多口 此の口多きに逢ふ（口は「管」か）

厚顏既積 厚顏既に積もるも

在志莫省 志に在りて省りみる莫し（第六章）

「北にある都で勤め苦しむ、西の郢の地でも苦勞する。地方の支局で役人ぐらし、これまで已に長い年月が経った。いったいどうして私は能力に乏しくて、このような難儀に逢うのであろうか。これまで厚かましくも無恥を重ねてきながら、そのことを心の中で反省することもしなかつた。」—都の健康で勤苦し、江陵でも苦勞する。いつまでも地方勤め、それも自分の無能ゆえ—と、第五章、第六章を通して地方勤務の苦勞と空しさを詠じており、その七年間が意を得たものでなかつたことを物語つ

ている。

主公であつた劉毅は、八年九月に劉裕に破れて自殺するが、この詩には劉毅敗戦のことに触れておらず、そのことを意味するような表現も見あたらない。従つて此の「中書に答ふる」詩は、おそらくそれ以前の作であろう。すなわち第八章に、

霜露荏苒 霜露は荏苒として

日月如捐 日月は捐つるが如し

相望式遄 相望む式て遄やかに

言歸言旋 言れ歸り言れ旋らんことを

とあるから、時に季節は秋。間もなく江陵には、劉毅討伐のための劉裕の軍が迫ってくるはずであつた。

劉毅と劉裕の戦において、劉毅の幕下に在つた靈運がどのような行動をとつたのか、記録が無いのでわからない。『宋書』本伝には其の結果だけが「毅の誅に伏するや、高祖は版して大尉參軍と為す」と記されているだけである。靈運は劉毅の幕下に記室參軍、衛軍從事中郎として七年間も勤務していながら、劉毅が破れるとすぐに其の敵である劉裕の幕中に入り大尉參軍に任じられている。このとき既に、靈運が烏衣巷で其の庇護を受けていた従叔謝混は、劉毅の仲間として劉裕の為に誅殺されていた。にもかかわらず靈運が劉裕の部下になつたことについては、それなりの理由があつたはずである。或いは劉裕幕下に在つた従兄弟の謝瞻、謝晦らの働きかけによ

るものかもしれないが、その詳細については未詳である。

なお此の時期、すなわち靈運が江陵にいた時、廬山の慧遠と何らかの接觸があつたのではないかと推測されるが、そのことについての記録はない。慧遠と靈運の関わりについては、靈運の「廬山慧遠法師誄」によれば既に靈運十五歳の頃のこととして次のようなことがあつた。予は志学の年、門人の末を希ふ。惜しい哉 誠願は遂げられず、永く此の世に違ふ。

予志学之年、希門人之末。惜哉誠願弗遂、永違此世。

靈運十五歳といえ、錢唐の杜明師の館から都に還つた年で、都では烏衣巷にあつた従叔謝混の邸に集まつて従兄弟たちと過ごしていた。この頃に靈運は慧遠の門に入ろうとしていたことになる。

『高僧伝』卷六、慧遠伝に、

陳郡の謝靈運は、才を負みて俗に傲り、推崇する所なきも、一たび相見るに及び、肅然として心服す。

陳郡謝靈運、負才傲俗、少所推崇、及一相見、肅然心服。

とあるのが何時のことであつたか明らかでないが、靈運が入門を願つた時のこととするのが、話としては自然である。しかしこれも詳しいことはわからない。

靈運は義熙九年に劉裕に従つて江陵から都に歸り、二月に秘書郎となるが、この年、慧遠のために「佛影銘」を書いてゐる。慧遠は義熙八年に廬山に佛影を画き、自ら其の銘を作り、更に靈運にも銘を依頼したもので、両

者の結びつきの深さを示している。また義熙一三年八月に慧遠が薨じた際には「廬山慧遠法師誄」を書いてゐる。

四、劉裕幕下

義熙九年、靈運は劉裕の幕僚となつて都に歸り、その二月に秘書郎となるが、十一年の末に事に坐して官を免ぜられている。これは靈運最初の免官であるが詳しい事情は記録が無いのでわからない。その半年後、十二年八月に世子（劉裕の長子義符）の中軍諮議・黃門侍郎として復歸しているが、この時期、嘗て烏衣巷で暮らした従兄弟たちとの贈答詩があるので、それを通して此の頃の靈運の様子をうかがうことができる。

1 従兄弟たちとの贈答詩

従兄弟たちとの贈答詩は次のようなものである。

① 義熙十一年夏、 靈運「贈安成（謝瞻）詩」

謝瞻「于安成答靈運詩」

② 義熙十一年暮 靈運「贈從弟弘元詩」

③ 義熙十二年八月頃 靈運「贈從弟弘元 時為中軍功曹在京」

曹在京

①「贈安成（謝瞻）詩」七章は、靈運が免官になる前、未だ秘書郎であつたと思われる義熙十一年の夏に、江州・安成郡の相であつた謝瞻に贈つた四言七章の詩。『文館詞林』卷一五二

謝瞻、字は宣遠（三八五〜四二一）は謝重の子で、謝晦の兄。謝瞻は義熙十一年（四一五）正月に安成の相（安成は江西省安福県の西）となり、この詩は其の夏に作られた。謝瞻の「安成に于て靈運に答ふる」詩（『文選』卷二五）の李善注に引く「謝靈運『宣遠に贈る』の序」に「從兄宣遠は、義熙十一年正月を以て守安成と作る。其の年の夏、贈るに此の詩を以てす。其の年の冬に到りて答有り」とあるのによつて、そのことがわかる。此の詩に答えた謝瞻の「安成に于て靈運に答ふる」詩の「第四章」に「肇めは允まことに規を同じくすと雖も、翻飛しては各々槩くわいを異ことにす。迢遞てうていたり封畿の外、窈窕てうていたり承明の内」とあるから、靈運は此の時期、宮中の承明殿に勤務していた。承明殿といえは著述の臣とか侍従の臣の詰所があるところであるから、靈運は義熙十一年の終り頃はまだ秘書丞であつた。

①安成に贈る詩

一、時に相応しい我が家の文化は前代からのもの、美しい道は先祖から承け継いだもの。ああ、優秀なる君は誉れ高き我が一族における大才。常に正しい道に従い、親しみの心をもち聡明さを身につけていた。奥深い言葉葉を学び、学問を貴んだ。

二、「用捨」ということを 行う者が他にいるだろうか、「賓名」だけが世に伝えられている。（このような世にあつて）君が祕丘を出発されると、千里の彼方まで

賢者の評判が広まった。朝廷を補佐し、また地方の藩国に雄飛して、業績をあげて政道を補け、「淑く問ね」てよき政治をされた。

三、かの影と響を例にして見るに（君と私の関係は）、形と声とに比べられるようなところが有つた。始めはただの兄弟でしかなかったが、ついには親しい友となつた。「棠棣」の詩に歌われているように親戚を隆んにし、「頰弁」の詩に歌われているように兄弟の情愛を大切にしたものだ。遙かに過ぎ去つた歲月、あの頃が懐かしくてたまらない。

四、天子の清明なる政治は教化を敦くされ、憐れみと慈しみに懐いをそそがれた。才徳ある人士を選び用いられることは、我ら黎民にまで及ぼされたのだつた。長江は既に永く流れているが、君の任地も亦た南方の地。袂を解いて別れを告げると、君は雲のごとく往き風のごとく飛んで行かれた。

五、手を振つて別れてまだそれほど経っていないようなのに、季節は次々と推移していった。春が過ぎ去つたと思うと、秋がもうやってきている。以前 時々一緒に漁をしたことが楽しかったが、今や別れ別れになり恋しくてたまらない。私の苦勞はこれからも久しく続くのであろうが、まったく我が憂いを抱え込んだようなもの。

六、その昔 先人の道には、「小魚を烹にるように」と教えている。また董安于と西門豹は、韋帶と弓弦とで自

分の性質の調和をはかったとか。清静を守り黙して過ごし、公平を期して私情に偏ることなく、謹んで令き治績を挙げて、私の心を慰め満たしてほしい。

七、駑馬は駿馬にはとても及ばず、臭草は香草の仲間には入れないものなのに。私は幾度もこの朽ちた身に目を掛けていただき、二度も慶たき雲に潤うことになった。しかし仰いでは天子の恩徳に慚づかしく、俯しては小人の譖害が恐ろしい。やはり旧と着ていた褐衣の塵を払って、世俗を離れた汾水のほとりに遊ぼうと思ふ次第。願わくは人材を求めて、誠を世に亮らかにされんことを。詳しくは書面にて申し上げます。

第一、二章で、一族の秀才であり人格者であった謝瞻を讃え、謝瞻が「用・舎」を実行する稀な存在であることと、そうして「用」いられるや其の実力を存分に發揮していることを述べる。第三章は、まだ謝混の邸にいた頃、謝瞻との仲が次第に親しいものになっていったことを述べ、その頃のことを懐かしく振り返っている。第四章、天子の清明なる政治のもと、謝瞻が安成郡に赴任したことを詠い、第五章で、謝瞻と別れたまま月日は流れるように過ぎ去り、我が身の上には今後とも辛い状態が続くであろうことを憂えている。第六章では、謝瞻に対して政治上・処世上の忠告をして、第七章、自分は朽質の身ながら官職につけていただいたが、小人の譖害を受けないうちに隠棲したいと言って結びとする。

靈運のこの詩に答えた謝瞻の詩は、『文選』卷二五に収められている。それは次のようなもので、五言五章から成っている。なお「安成」の「成」字、『文選』に収める謝瞻の詩では「城」に作る。

安成にて靈運に答える

一、枝も繁つて林はいよいよ盛んとなり、波が澄んで其の源はますます深くなつていく。(その林や源のように) 誉れ高き我が一族は優秀な人材を立派に育ててきたが、君こそは此の祖先の血筋を継いだのだ。情愛こまやかに風雅の誠を結び、靄の盛んに立ち上るように芳しき言葉を連ねている。仕進の道も事ある毎に遷り進み 爵位も年とともに高くなつていく。

二、花と萼とが相い照らすように兄弟が互いに進めあい、鳥が啼き交わして声を同じくするのを悦ぶように仲良くした。親戚を親戚として、君は私に手厚くし、賢才を賢才として、私は君を心から尊んでいた。才能を比べれば私は君の輝かしさには及ばないが、年齢を比べれば私は少しばかり上。萎れた葉が栄える枝をいとおしみ、涸れた流れが大川の広さを讃えるように、私は君を愛している。

三、仕事については本来の志を果たせず、道を行つては貧を楽しむところまでいかなのが恥ずかしい。しかし幸いにも役人になって俸禄を受けることができ、江南の片隅に勤めている次第。時節が巡り、月日が次第に過ぎゆくのを悲しみ、そちらに近づこうとしても適

わず遙かな隔たりを嘆くだけ。ただ思いを述べて敬愛する君に贈ります、私は君のことが心配でならない。

四、初めはさほど違わぬ高さであったが、次第に隔たりができて今や位は桁違い。私は遙かに地方の安城におり、君は宮中の承明殿づとめ。行く道は懸け離れてしまったが、道理にてらしてみればこれが当たり前。白糸や岐路には何時も嘆きがともなうもの、まして愛する君と隔たっているのを嘆かずにおれようか。

五、片足で進む私は僅かな道のりに満足し、羽根を損なつたような此の身では近くをぐるぐる回っているだけのこと。高い空や遠い道を知らないわけではないが、ひとたび道を違えたなら咎めがあるだけ。歳が暮れば厳ば霜雪が厳しくなるように、人生の半ばを過ぎれば厳しさは増す。自分の才能の乏しさを知るにつけても我が友が憚られ、なかなか前には進めない。どうか元気で、よき仕事に励まれよ。胸のうちを述べてお返事と致します。

② 靈運「贈従弟弘元詩」四言六章

義熙十一年の十二月頃に、従弟の驃騎記室参军であった謝弘元に贈った詩である。時に靈運は、第三章に「北の官署に幕僚として勤め」とあるように未だ秘書郎であった。「弘元」については史書に記述が無いので、詳しいことはわからないが、靈運の従弟、謝弘微の兄弟であろう。この詩の序によれば、驃騎將軍の記室参军となつ

て義熙十一年（四一五）十月十日に江陵に赴任したことが明らかである。なお、時の驃騎將軍は、荊州刺史劉道憐りゅうどうれんであり、その下の驃騎長史は謝方明（謝惠連の父）で政務の全てを担当していた。弘元が驃騎記室参军となつたのは此の方明の推薦によるものである。〔文館詞林〕卷一五二 内容は要約によって示す。

第一章、江陵に赴任した弘元の才徳を讃えて詠い出しとし、第二章で、弘元が任官して荊州府に赴任したことを述べて、その活躍を大いに期待していることを詠う。そうして第三章では、以前から共に暮らしていたので、同じ所で勤務したいと願っていたが、此のたび遠く離ればなれになってしまったことを嘆いている。第四章、遙か三千里の彼方にある荊州に赴任した弘元に同情し、慰めの言葉を述べ、第五章では、江陵に赴任した弘元のことを日夜思い続けていることと、以前から持っていた願いが果たされそうにないことを述べる。結びの第六章では、官吏を止め、本性に順って生きてゆきたいこと、交情を堅く結び、共に郷里に帰りたいものであることを詠う。

③ 「贈従弟弘元一時為中軍功曹住京」五章

其の後、義熙十二年（四一六）八月、劉裕が長安の姚泓討伐に出兵した時に、劉裕は靈運を、居守の任に当たつた驃騎將軍 劉道憐の諮議参军に任命している。次いで靈運は劉裕の世子（義符、後の少帝）の中軍諮議・黃門侍

郎に任じられているが、その頃に従弟の弘元に贈った四言五章の詩である。

劉裕は義熙十二年八月に、世子義符を中軍將軍・監太尉留府事とし、大軍を率いて北伐に出発しており、弘元はこの時、中軍將軍府の功曹として都に呼び戻されたものと考えられる。此の年の九月に劉裕は彭城に到り、十月に其の前鋒は洛陽を落とし、十一月、劉裕は左長史王弘を建康に派遣して、朝廷に九錫を求めている。この詩は、任務のために北方へ行くことになった弘元を送別する作である。従って義熙十二年の後半に作られたものと考えてよからう。北伐の時に留守の任に当たったのは中軍將軍となった世子劉義符であるから、靈運は其の下にあったことになり、弘元と同じ役所に勤務していたことになる。〔文館詞林〕卷一五二

第一章で、四嶽の和氣を受けて此の世に生じた謝氏を讃え、その子孫としてここに弘元が存在することを述べて詠い出しとする。そうして第二章では、二人の朋情の堅さを述べ、出処進退がうまくいかなかった自分の気持ちをわかってほしいと詠う。第三章、弘元が公務のため北方に向かうことを述べ、第四章で、嘗て謝混の烏衣巷の邸で、従兄弟たちが仲良く暮らしていた頃のことを思い出して詠う。結びとしての第五章では、別れるに当たっての辛い思いを詠う。

嘗て烏衣巷で、謝氏の将来を担う若者達として謝混に

期待されていた人たちは、東晋末の混乱の中でそれぞれの路を模索していた。謝瞻、謝弘元については已に詩を通して見てきたが、その後謝瞻〔宋書〕卷五六本伝〕は、宋国の中書・黄門侍郎、相国従事中郎、豫章太守となっている。弟の晦が年少にして高位に在ることを心配して、晦に「吾が家は素退を以て業と為し、時事に干豫するを願はず。交遊も親朋に過ぎざるに、汝は遂に勢は朝野を傾く。此れ豈に門戸の福ならんや」と言ったこともあった。永初二年（四二二）に三五歳で卒している。謝弘元については『宋書』に記録が無いので、靈運の詩に記されている事以外には不明である。その他の謝晦、謝曜、謝弘微は其の後どのような路をたどったのであろうか。

先ず謝晦〔宋書〕卷四本伝〕は、本伝に「風姿美しく、眉目分明、鬢髪は漆を點ずるが如し。文義に涉獵し、朗贍多通なり」と称される俊才で、義熙七年（四二二）頃に劉裕の大尉參軍となり、以後、其の文才、政事の才を認められて「深く愛賞を加え」られ、数年のうちに侍中にまで昇進。高祖受命の時には佐命の功を以て武昌縣公に封ぜられている。高祖が没して少帝が即位すると領中書令を加えられ、徐羨之、傅亮らと共に朝政を輔佐するまでになった。しかし少帝を廢して即位させた文帝（劉裕の第三子、劉義隆）によって、徐羨之、傅亮とともに誅殺された。元嘉三年（四二六）三七歳であった。謝混が「晦は自らを知るも善を納るること周からず。設し復た功三才を濟さば、終には亦た此を以て恨みと為

さん」と評したように、輔政の地位に登りつめたところで残念なことになっている。

謝弘微（『宋書』卷五八本伝）は、伯父謝混が劉毅の腹心として誅された後、混の妻であった晉陵公主から混の家事を全て委ねられ、九年の後「室宇修整、倉粟充盈。門徒業使、平日に異ならず。田疇墾闢、舊に加ふる有り」という状態にまでして、人々に感嘆されている。文帝が即位すると黄門侍郎となり、王華、王曇首、殷景仁、劉湛らと「五臣」と稱されている。その後も順調に出世し、元嘉一〇年に四二歳で卒しており、謝晦とは対照的な生涯を送っている。かつて謝混が「弘微については、何も言うことはない」と高く評価していた通りであった。

弘微の兄の謝曜は、御史中丞、彭城王劉義康の驃騎長史となり、元嘉四年に卒している。謝混に「才を待みて、操みさおを持つこと篤あつからず」と評された程度の人物であったようである。

2 顔延之との交遊

この時期、すなわち義熙十二年に靈運が劉裕の世子義符の中軍諮議・黄門侍郎となった頃、顔延之（靈運の一歳年上）との交遊が始まっている。延之は十二年の八月に、江州刺史劉柳の後軍功曹から、義符の中軍行参軍に遷っている。靈運と延之は、この時、同じく中軍將軍府に勤務することになった。それ以来二人は、同じ役所に所属することが多くなり、従って其の境遇も似てくる。

すなわち、

・義熙十四年（四一六）

靈運は宋国黄門侍郎から、従事中郎・世子左衛率に遷る。

延之は世子舍人となる。

・宋、永初元年（四二〇）

靈運は太子左衛率となる。

延之は太子舍人となる。

・永初二年（四二二）

靈運と延之は、廬陵王義真（劉裕の第二子）に接近。

・永初三年

靈運は永嘉太守に、延之は始安太守に左遷される。

・元嘉三年（四二六）

延之は中書侍郎として、少し後れて靈運は秘書監として朝廷に徴召される。

その間、両者は時の政治状況、詩文、学問、佛教などについて語り合ったことであろうが、このうち詩文についての話題として、陶淵明のことが度々出てきたのではないかと推測される。

すなわち、東晋末、延之は三〇歳の時、江州刺史劉柳の後軍功曹として約一年の間、尋陽に勤務していたが、その時期に、既に官を去って尋陽に住んでいた淵明と交遊を重ねていた。年齢は淵明が二十歳も上であるから「忘年の交り」であった。『宋書』陶淵明伝にはそのことが、顔延之、劉柳の後軍功曹と為り、尋陽に在りて、潜と情款あり。

顔延之為劉柳後軍功曹、在尋陽、與潛情款。

のように記されている。延之の「陶徵士誄」(『文選』巻五七)には、その頃の様子を次のように述懐している。深く昔を思い、情を遠くして其の死を偲ぶ。あなたが世俗と絶つてより、私の暇も多くなり、屢々往き来して、村は近く家は隣という間柄であった。夜は楽しく飲みかわし昼は休息。いつも手を携えて、舟にも馬車にも乗らなかつた。かつて宴を張つて楽しんだとき、杯を交わして互いに戒め合つたものだ。私は「我が身だけが正しいとする者は危険であり、真四角の者は塞がつてしまう。賢人の出處進退については、昔の書物にも記されている。手本とすべきことは近くにある。私の戒めをお忘れなきよう」と。するとあなたは明らかに動揺して「私の言葉なかばにして言つた「多くの人々に違ふと過ちを招き、世の習慣に逆らうと真先に倒れてしまう。身体と才能は中味の有るものではないし、榮譽と名声も無くなつてしまうものだ」と。言葉も遠くなつてしまつた。いったい誰が私の過ちを戒めてくれるのか。ああ、哀しいことだ。

深心追往、遠情逐化。自爾介居、及我多暇「伊好之洽、接閭隣舍。宵盤晝憩、非舟非賀」念昔宴私、舉觴相誨。獨正者危、至方則礙「哲人卷舒、布在前載。取鑒不遠、吾規子佩」爾實愀然、中言而發。違衆速尤、近風先鑒「身才非實、榮聲有歇。叡音永矣。誰箴余闕。

これによれば此の時期、二人は近くに住んでいて何時も

行動を共にしていたようである。

それから六年の後、延之は靈運とともに廬陵王義真グループとして徐羨之らに睨まれ、靈運は永嘉郡に、延之は始安郡に左遷された。延之は赴任の途中、尋陽に立ち寄つて淵明と旧交を温めている。時に淵明は五八歳、「本伝」には次のようである。

後に始安郡太守になると、赴任の途中に尋陽に立ち寄つて、日々、潜の所に造り、その度に必ず酣飲して酔を致した。そうして去るに臨んで二萬錢を留めて潜に與えた。潜はそれを悉く酒家に送り、酒が飲みたくないとそこに出發して行つたという。

先是、顔延之為劉柳後軍功曹、在尋陽、與潛情款。後為始安郡、經過、日日造潛。每往必酣飲致醉。臨去、留二萬錢與潛。潛悉送酒家、稍取就酒。

靈運は淵明と直接に会つたことは無かつたようであるが、延之の話を通して其の人柄と詩文の詳細を知つたものと考えられる。靈運は延之から陶淵明の話を知り、単なる特異な詩人として聞き流したか、それとも取り入れるべきものは取り入れたのか。

靈運の詩と淵明の詩を比べてみると共通する所が幾つか見られる。例えば、靈運の「自然の理」と淵明の「真」である。「自然の理」と「真」は、どちらも「此の世界を成り立たせている道理」を指しており、靈運も淵明も、それに従つて生きていこうとした。このことは淵明や靈

運が初めて言い出したことではなく、中国に古くから存在する考え方であるが、それを人生の目標として詩に詠い始めたのは淵明であり靈運であった。靈運は既に「真」を詠じていた淵明の詩から「自然の理」体得についての示唆を得たのではなからうか。^①

もう一つ例を挙げると、「二句二文」の句作りがある。^②

「一句二文」とは、例えば、

これは一句の中に、例えば「始寧の墅に過ぎる」詩の、

野曠 沙岸淨 野は曠く 沙岸淨く

天高 秋月明 天は高く 秋月明らかなり

のように、一句の中に二つの文が使われるものである。

淵明の詩には此の「一句二文」の句が多く、そうして靈運にもそれが特に多い。淵明より前の詩人には此の「一句二文」の句が極めて少ないので、淵明の句作りの特徴であったとしてよからう。そうして靈運はその「一句二文」の句造りを自分の詩に取り入れ、特に自然描写において効果を挙げている。すなわち此の方法によれば、同時に存在する二つの情景が、ひとまとまりの景として、絵でいうとそれが一面として作者の目に映る。靈運は、その二つの情景を二句に分けて表現すると、繋がり（緊密性）が薄れてありのままの情景描写ができないと考えて一句にまとめたのであろう。そうして、更にそれを対句にすることによって画面には奥行きと広がり生まれ出る。自然の風景を詳細に、しかも立体的に表現するため工夫であったが、これも淵明の手法からヒントを得た

のではなからうか。

靈運の詩と淵明の関わりについては、稿を改めて取りあげることにするが、靈運は延之から、陶淵明の詩作についての詳しい情報を得ていたように思われる。

3 「撰征の賦」について

東晋の末、劉毅の勢力を一掃した劉裕は、東晋王朝篡奪の計画を着々と進めてゆくが、その流れの中で東晋の名族である謝氏一族も、生き残りの為の方策を模索していた。そのような中、義熙十二年の八月、劉裕はその勢力を天下に示すことを目的として北伐を開始して後秦の姚泓を攻め、優勢に戦いを進めて十月には洛陽に至り、翌年の九月には長安に到着した。靈運は仲冬十一月に、彭城（徐州）に軍を休めていた劉裕のもとに、朝廷の命により慰勞の使者として赴き、翌年の春に都に帰ってきた。長編「撰征賦」はその折りの作である。

なお同じ年の十月、延之は宋公を授けられた劉裕の許へ、仕えていた豫章公府からの祝いの使者として赴いている。その道中で作ったのが「北のかた洛に使用する」詩と「還りて梁城に至りての作」の二首（『文選』卷二七）で、『宋書』延之伝によれば、「文辞藻麗」であったために、劉裕配下の謝晦、傅亮に賞賛されたのである。謝晦は靈運の従兄弟で、少年のころ烏衣巷の謝混の邸に集まっていた間柄であるから、この詩のことは謝晦を通して靈運の耳にも目にも入ったに違いない。従って靈運の「撰

「征賦」は、延之の彭城道中の作を意識しての作という一面もあつたのではなからうか。

賦の内容は当然のことながら劉裕の北伐の功を讃えるものであつたが、それに合わせて東晋を支えた祖父謝玄の功績を述べ、更に叛逆の臣の末路について随所に触れている。

北伐に成功した劉裕が晋朝篡奪を狙っていることは既に明白であり、靈運もそれは充分に承知していたに違いない。靈運としては叛逆の臣の末路を示したところでどうなるものでもないと思つていたのであろうが、それでも晋朝の臣としては言つておかねばならなかつたのである。しかし一面では、劉裕のような王朝篡奪の臣の存在によつて、どこまでも晋朝を支えた祖父謝玄の存在は更に輝かしいものとなることも、また確かなことであつた。

4 東晋滅亡と靈運

その後の靈運について『宋書』本伝には、
 仍よて宋國の黃門侍郎に除せられ、相國從事中郎、世子左衛率に遷る。輒かたりに門生を殺すに坐して、官を免ぜらる。

仍除宋國黃門侍郎、遷相國從事中郎、世子左衛率。坐輒殺門生、免官。

と記されている。劉裕は義熙十四年(四一八)六月に相國となり、封を宋公に進められ、翌元熙元年には宋王となつた。靈運は宋國の黃門侍郎に、更に相國從事中郎、世

子左衛率に遷つている。ここにおいて靈運は完全に劉裕の臣となつた。この年、謝靈運は三十四歳であつた。

この年の九月九日に彭城(今の徐州市)で開かれた重陽の宴は、職を辭して退休する宋國の尚書令孔靖こうせいの送別を兼ねていた。靈運は此のとき「九日、宋公の戲馬台の集ひに従ひて孔令を送る」(九日従宋公戲馬台集送孔令詩)を作つている(『文選』卷二十)。その後半において靈運は次のように詠つている。

歸りゆく人は海の果てに行くために、冠をぬいで朝廷の列位を去ろうとする。供人は棹をおさめて入江の渚に船を寄せ、日景を指しながら音楽の終わるのを待つている。

河の流れには急な波があるし、馳せゆく馬車に緩やかな轍などはない。どうして遠き別れの名残おしさだけであるうか、わが宿心の遂げられぬことをこの別れにあたつて恥ずかしく思う。彼の美わしき丘園の道よ、ため息をついて薄劣なる己を傷むことである。

帰客遂海隅、脱冠謝朝列。弭棹薄枉渚、指景待樂闕。
 河流有急瀾、浮駢無緩轍。豈伊川途念、宿心愧將別。
 彼美丘園道、喟焉傷薄劣。

靈運はこのように、宿心、すなわち丘園への隱棲を遂げることのできない自分を恥じている。或いは孔靖の隱棲は、東晋に代わらんとする劉裕にこれ以上ついていくことできなかった、そのための東歸であつたのかもしれない。もしそうであれば謝安、謝玄が懸命に支えてきた

晋を見捨てて宋に仕えている靈運の胸の内は此の上なくつらいものであつたらう。靈運は義熙十一年の「從弟の弘元に贈る」詩に、

私は心に恥じること厚いものがあるが、行き迷うことは未だそれほど遠くはない。平生のちよつとした言葉にも誠を尽くし、旧交を変ぜぬようなことはしないつもりだ。棹を整えて風向きを伺い、天候を見計らつて一緒に郷里に反ることにしよう。

心愧雖厚、行迷未遠。平生結誠、久要罔轉。

警掉候風、側望雙反。

このように隱棲の願いを詠じているが、これも晋朝を宋朝に乗り換えることについての自責の念によるものであろうか。

さて、二姓に仕えることになった靈運には、やはり内心忸怩たるものがあつたであろうが、いまや靈運は謝氏の中心となり、王朝の交代を超えて謝氏を守つていかなければならない立場にあつた。そのような、細心の注意をはらつて対処しなければならぬ状況にありながら、其の「褊激」(『宋書』本伝)なる性格の故にであろう、靈運は殺人事件を犯してしまふ。『宋書』本伝によれば恭帝の元熙元年(四一九)「輒りに門生を殺すに坐して、官を免ぜらる」とある。これは靈運の門生である桂興が、靈運の愛妾の勾搭と密通し、それを忿つた靈運が桂興を殺して江に投げ込んだ、というものである。当時、権勢を有している者が自分の部下を殺してもそれほど問題に

はならなかつたようであるが、この時はそうはいかなかつた。御史中丞の王淮之は靈運と仲が好く、そのため此の事件を取り上げるつもりはなかつたが、靈運失脚の機会を窺つていた反対派の尚書僕射の王弘が、職権を越えて靈運を弾劾し、その結果、靈運は勿論のこと、王淮之まで免官になつてしまつた。靈運二度目の免官であるが、次の年、永初元年に劉裕が恭帝の禪りを受けて帝位に即くと散騎常侍として徴されている。

東晋が滅んで宋朝の世となり、靈運は宋の臣となつた。

『宋書』本伝には、

高祖 命を受くるや、公爵を降して侯と為し、食邑は五百戸。起ちて散騎常侍と為り、太子左衛率に轉ず。靈運は性為るや褊激、禮度を愆ること多し。朝廷は唯だ文義を以て之を處するのみにして、應實を以て相許さず。自ら才能宜しく權要に參ずべしと謂ふに、既に見知されざれば、常に憤憤を懷く。

高祖受命、降公爵為侯、食邑五百戸。起為散騎常侍、轉太子左衛率。靈運為性褊激、多愆禮度。朝廷唯以文義處之、不以應實相許。自謂才能宜參權要、既不見知、常懷憤憤。

のように記す。「公爵を降して侯と為」すとは、父祖以来の「康樂公、食邑一千戸」が「康樂侯、食邑五百戸」に降格されたことで、王朝が交代したことによる処置であつた。靈運は「謝封康樂侯表」を奉り恩を謝している。しかし靈運に対する待遇の変化はそれだけでなく、その

「為性褊激、多愆禮度」ということもあつてか政事には関わらせてもらえず、ただ「文義」の事に関与させるだけであつた。しかしそれは「為性褊激」というだけの理由ではなく、東晋の遺臣、それも重臣の子孫である靈運に対する不信の念に由るものであつたらう。高祖劉裕には、靈運を政治面で重用する気持は最初から無かつたのではなからうか。靈運がそのことに気付かなかつたことが、その後の靈運の運命を狂わせてしまった。靈運は自分の才能に自信を持ちすぎて、周囲の状況を冷静に判断することができなかつたのである。宋朝になつてからの靈運の動きについては、稿を改めて見ていく。

(注)

- ① 「謝靈運の『理』と陶淵明の『真』」(安田女子大学『中国学論集』第三五号)
- ② 謝靈運の「一句二文」については、既に大立智砂子「謝靈運五言詩における『句中の主述反覆』について」(『中国詩文論叢』第二〇集)があり、附表として魏晋六朝における用例がまとめられている。